

「男、突っ走る！」

第11回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

松野	西澤	佐藤	尾形	五十川	鬼頭	宮田	中岡	高階	松井	志田	山辺	田崎	濱口	門野	木内	木内	木内	
	隆	安		孝	美	春	壮	康	悠	一	良	寧	賢		健	真	雅	
	進	雄	篤	之	彩	奈	吾	行	武	喜	磨	樹	々	哉	次	郎	保	也
	(57)	(53)	(59)	(53)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(13)	(44)	(17)	
中央高校2年2組副担任	中央高校2年2組担任	中央高校2年2組担任	中央高校2年4組担任	中央高校2年6組生徒	中央高校2年6組生徒	中央高校2年5組生徒	中央高校2年2組生徒	雅也の弟	雅也の母	中央高校2年2組生徒								

1 中央高校・全景（朝）

N 「かどけんのモヒカン騒動の翌日、僕らは晴れて正式に二年生となりました。始業式も滞りなく終わり、新しく二年二組としての生活が始まったのです。新しいクラスは、きのしゅんを始め一部のメンバーが別のクラスに変わり、反対に別のクラスから数名、二組の仲間入りを果たしました」

2 同・2年4組教室

安代が生徒たちの前で話している。生徒の中に隼の姿もある。

N 「去年担任だった尾崎安代先生は、きのしゅんが移った二年四組の担任となりました」

3 同・職員室

佐藤が仕事をしている。

N 「学年主任の佐藤篤先生は、持ち上がりとして引き続き僕たちの学年主任となったのです」

4 同・2年2組教室

N「そして、僕たちのクラスはと言うと……」

雅也たちが名簿順に座っている――

担任・西澤隆雄（43）が黒板の前に立っている。

西澤「改めて、今年からこの学校に赴任してきました西澤隆雄と言います。専門教科は家庭科です。よろしく願います」

拍手をする一同――教室の後ろに立っていた副担任・松野進（57）が、前に来ると、

松野「副担任を務める松野進です。この春、南太平洋のサモアという国から戻ってきました。久しぶりの日本での学校生活、皆さんと一緒に楽しみたいと思います。よろしく願います」

拍手をする一同。

西澤「早速、いくつか連絡事項があります。順番にプリント配っていきますね」

と、プリントを配っていく——賢哉、前から回ってきたプリントを、後ろの雅也に渡す。

雅也、プリントを見る——『修学旅行について』と書かれているプリント。

雅也「修学旅行かぁ」

賢哉「なあ、五月の北海道って寒いのかな」

雅也「どうだろうねえ」

賢哉「楽しみだな、修学旅行」

雅也「そうだね。小樽散策とか、ジンギスカンとか、いろいろ行ってみたいな」

ウキウキした顔で書類を見ている雅也。

5 木内家・全景（夜）

6 同・居間

夕飯を食べている雅也、真保、健次郎。

雅也「健も今日から中学生なんだ。あつという間に三年間終わるぞ」

健次郎「新しい友達、できると良いんだけど」

雅也「最初はそれに手こずるかもしれないけど、すぐに仲良くなれるさ」

健次郎「そうだね」

真保「そういえば、修学旅行って北海道なのよね。飛行機で行くってなると、空港まで送迎しなきゃいけないのかしら」

雅也「いや、確か学校までバスが来て、それで空港まで行くんだった。だから俺たちは、自転車でいつも通り学校に行けば良いの。宿泊セットの入った大きい荷物は事前に預かるってプリントに書いてあった」

真保「そっか。いや母さん、空港まで車で行く自信なくてどうしようかと思ってたの。バスが来るなら良かったわ」

雅也「何だ、そんな心配してたの」

真保「いろいろお土産買ってきてね」

雅也「はいはい」

7 中央高校・2年2組教室

良樹、一磨、高階康行（17）が旅行

雑誌を見ている——雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

良樹たち「おはよう」

雅也「何見てるの？」

一磨「旅行雑誌。北海道のこと、いろいろ見  
ておこうと思って、康行が持ってきてくれ  
たの」

康行「少しでも、いろんな情報を知つといた  
ほうが良いと思って」

N「クラスメイトの高階康行。昨年から同じ  
クラスで、かっちゃんと同じ和太鼓部に所  
属しています。鉄道会社で働く父を持って  
いるため、電車などの知識もあり、こうい  
うイベントの時にはとても頼りになる人財  
でもあるのです」

雅也、旅行雑誌を見ると、

雅也「こうして見ると、結構北海道も名所と  
か観光地あるんだね。いろいろ行ってみた  
いね」

と、笑い合うと、旅行雑誌を康行に返却し、自席に着く——賢哉が悠喜と一緒に自席で競艇新聞を読んでいる。

雅也「朝から何読んでるかと思ったら」

賢哉「今日、良い勝負なんだよ」

雅也「俺に言われても分からないよ」

賢哉「そういえば、修学旅行の班ってもうそろそろ決めるみたいなこと言ってたよな」

雅也「うん、確かそんなようなこと言ってたね」

悠喜「木内は、どうするんだグループ」

雅也「え？」

賢哉「（良樹たちを見て）あいつらと一緒にの班になるのか？」

雅也「迷ってるんだよね。良樹、かつちゃん、康行のグループも良いだろうし、かどけんたちとも一緒にになりたいし……部屋のグループと自由行動のグループが違うんだっから、例えば部屋班は良樹たちと一緒にで、自由行動班はかどけんや志田たちと一緒にって

こともできるけど」

賢哉「器用だな、お前は」

雅也「だって、一生に一度の修学旅行だよ。

いろんな子と一緒に楽しみたいじゃない。

だからちよつと贅沢だけど、行動するたび

に違うメンバーと一緒にになりたいなって思

ってる」

賢哉「俺たちと一緒にになるときに、そーびも

入れたいと思ってるんだけど」

雅也「そーびを？」

と、クラスメイト・中岡壮吾（17）

が登校してくる——誰にも声をかけず、

静かに席に座る。

N「クラスメイトの中岡壮吾は、中学から同

じですが当時は一度もクラスと一緒にになっ

たことがなく、お互いに存在は知っている

程度でした。昨年から同じ二組でしたが、

昨年僕の怒りスイッチをオンにした光岡君

と一緒にいることが多かったので、なかなか

か話すこともなかったのです」

賢哉「（そーぴを見て）最近、孤立してるみたいなんだよ」

雅也「え、そうなの？　だって、光岡君たちと一緒にいたじゃん」

悠喜「（小声で）あまり大きい声じゃ言えないけど、そーぴ、光岡に見捨てられたんだって」

雅也「見捨てられた？　何で？」

悠喜「さあ。俺も詳しくは知らないんだけど、何だかソリが合わなくなったらしいぞ。最後なんて、結構そーぴをパシリに使ってたって言うし」

雅也「パシリに使うなんて、そんなの友達でも何でもない。ただ利用しただけじゃない。やっぱり、光岡君ってロクなタイプじゃないね」

悠喜「だから、見かねたおっちゃんが、そーぴを俺たちのグループに入れようって」

賢哉「良いか？」

雅也「俺は誰が来ても大丈夫だよ」

賢哉「そーぴ（と壮吾を呼ぶ）」

壮吾「どうしたの？」

賢哉「修学旅行の自由行動、俺たちと一緒に

動かないか？」

壮吾「良いの？」

雅也「当たり前でしょ。一緒に楽しもうよ、

修学旅行」

壮吾「うん、ありがとう」

悠喜「よし、決定だ」

雅也「移動中のバスの中も、みんなで楽しも

うよ」

賢哉「それも楽しいだろうな」

壮吾「カードゲーム持ってくるよ」

悠喜「良いね」

談笑している雅也たち。

## 8 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンでブログを書いている  
——と、壮吾からフォローの通知が来  
る。

雅也「あ、そーぴだ」

と、画面をクリックする——釣りをしている壮吾の画像が映っているブログに画面が切り替わる。

雅也「へえ、そーぴは釣りブログやってたんだ。コメントしとこう」

と、壮吾のブログにコメントの文章を打つ。

雅也の声「フォロー申請ありがとう。こちらでもよろしくね」

と、コメントを送信する。

N「この頃は、クラスメイトと学校だけではなく、ブログでもコミュニケーションを取るようになっていました。普段クラスで顔を合わせていても、なかなかタイミングが合わずに話せない時や、たまにはブログのコメント欄が学校の業務連絡になっており、僕や周囲の人たちにとって、ブログは学校に続くコミュニケーションの場となっていたのでした」

と、居間から真保の声がする。

真保の声「一体何があったのよ？」

訝しそうな顔で部屋を出ていく雅也。

9 同・居間

雅也が入ってくる——真保と健次郎が話している。

雅也「どうしたの？」

真保「健が学校に行きたくないって言いだして」

雅也「え？」

健次郎「……」

雅也「どうした、何かあったのか？」

健次郎「……」

雅也「黙ってちゃ分からんだろ」

健次郎、黙ったまま出ていく。

雅也「健ッ……」

真保「……」

雅也「学校で何かあったのかな？」

真保「まだ始まって一か月も経ってないのよ。」

それなのに一体何があるって言うの」

雅也「クラスに馴染めてないとか、多分そういう理由じゃないかな」

真保「それで学校に行きたくないって言うの？」

雅也「小学校とは違うんだ。健だって、中学生になって難しい年頃になるんだから。これからもっと、自分の意見を通すようになるかもしれない。ただでさえ、うちの中学校は学校のルールが刑務所みたいに厳しいからね。そんな学校生活があって、プラス部活で先輩と後輩に挟まれるから、特に二年生からキャラが豹変する子もいる。うちの周りにも、そういう子がたくさんいた。健だって、健の友達だってそうなる可能性もあるからね。これから気をつけないと……」

真保「健に限って、そんなこと」

雅也「この子に限って大丈夫だろうって思ってた子が、意外と変わっちゃうからね……」

健には、そうさせないようにしなきゃ……」

難しい顔の真保。

10 中央高校・コンピュータ室

孝之、美彩、春奈が作業をしている――  
――寧々が来ており、パソコンで北海道  
の写真を見ている。

春奈「最近、寧々だけじゃなくて、結構パソコン借りて、北海道のこと調べてる子いるんだよ」

寧々「こういう時、コンピュータ部って便利だよ。すぐに調べものできるんだもの」  
美彩「けど、私たちは別に遊んでるわけじゃないんだからね」

寧々「分かってる」

孝之「北海道なんて、なかなか行くこともないですからね。みんなが気合入れて、いろいろ調べたくなる気持ちもわかりますよ」

春奈「班も自由行動も、基本クラスだもんね。五十川やパンテーンとも一緒に行動したか

ったけど」

孝之「確かに、こういう時ってどうしてもク  
ラス別になっちゃいますもんね」

美彩「そういえば、今日パンテーン見てない  
けど？」

寧々「今日、学校には来てたよ」

孝之「休みですかね」

春奈「私は何も聞いてないけど」

11 同・廊下

雅也が携帯電話で話している。

雅也「そっか……健、今日も休んだんだ。担  
任の先生に、相談したほうが良いかもね。  
うん、俺も何かあったら一緒に学校行くか  
ら。うん、それじゃあ。今日、六時には帰  
るから」

と、重々しく携帯電話を切る。

12 同・コンピュータ室

雅也が入ってくる——寧々、孝之、春

奈、美彩が一つのパソコンを囲んで、

北海道のホームページを見ている。

雅也「あれ、みんなどうしたの？」

春奈「やっと来た。今日休みかと思ったじゃん」

雅也「ごめん、ちょっと電話してたから」

美彩「パンテーンは、北海道で行ってみたいところある？」

雅也「どこだろう…：白い恋人の工場かな。

あれ美味しいじゃん。あと、キャラメル買ってみたい」

春奈「甘いものばっかじゃん（と笑う）」

雅也「だって甘いもの好きなんだもん」

笑い合う一同。

13 道を走る観光バス

N 「ゴールデンウィークが明けて間もなく、  
僕たちは修学旅行のために北海道へ出発しました」

眠る生徒、おしゃべりする生徒など、  
それぞれ自由な時間を過ごしている生  
徒たち――雅也、賢哉、悠喜、健が通  
路を挟んで座っている。しおりを読む  
雅也の隣で、携帯電話で競艇の実況を  
見ている賢哉。

雅也「ねえ、かどけん。こんな時ぐらい、競  
艇見るのやめたら？ せっかくの修学旅行  
なんだからさ」

賢哉「今日は良い試合だからな、これ見逃す  
わけにはいかないんだよ」

雅也「しようがないね、全く。(と鞆から煎  
餅の袋を取り出すと) お煎餅、食べる？

美味しいよ、これ」

賢哉「ああ、もらうよ」

と、煎餅を渡す雅也。

悠喜「(健に) 女へのお土産、ちゃんと買う  
んだろ？」

武「言い方な」

雅也「この間、一緒に帰ってた子でしょ？」

武「見てたのか」

雅也「まあね」

悠喜「（雅也に）なあ、飛行機で北海道まで  
どれぐらい？」

雅也「（しおりを見ながら）予定表見ると、  
大体一時間半だって」

悠喜「結構早く着くんだな」

雅也「まあ、新幹線とかバスと違って、信号  
がないからね。飛行機は一回飛んじやえば、  
着陸するまでノンストップだから」

と、寧々がやってくる、

寧々「ねえ、飴食べる？」

雅也「食べる！（と飴を受け取ると）お返  
しに、お煎餅いる？」

寧々「お菓子のチョイスよ」

雅也「小腹空くときには、ちょうど良いんだ  
から。このお煎餅美味しいよ」

寧々「（煎餅を受け取ると）確かに、この煎  
餅は定番だけどさ」

雅也「そうでしょ。醤油風味で美味しいんだから（と煎餅を食べる）」

15 滑走路を離陸する飛行機

16 北海道・農場

牛が草を食べている。

N「移動中も、現地に着いてすぐランチのため訪れたジンギスカン専門店のレストラ  
ンでも、僕ら二組のテンションは他のどの  
クラスにも負けないほどの高さだったので  
した」

17 同・旅館・全景（夜）

18 同・同・一室

和室の造りで、布団を敷いている雅也  
——同室となっている賢哉、悠喜、壮  
吾。

賢哉「他のクラスの男子は洋室でベッドだっ

て言うのに、俺たちは和室かよ」

雅也「しよすがないでしょ。クラスの男子の比率と旅館の部屋数の関係で、二組の男子は和室になっちゃったんだから」

賢哉「ベッドが良かったな、俺は」

雅也「畳も良いと思うけどな」

壮吾「和室でも良いじゃん。俺は、畳のほうが落ち着くな」

雅也「分かるよ、そーぴ。修学旅行でベッドは、あまりに合わないよね」

悠喜「まあ、ゆっくり寝られるんだったら、どこでも良いさ」

雅也「あ、そろそろお風呂の時間だよ。準備しないと」

19 同・同・露天風呂

風呂に使っている雅也、賢哉、悠喜、  
壮吾、その他男子生徒たち。

雅也「やっぱり露天風呂って良いよね」  
賢哉「良い風呂だなあ」

雅也「リアクションが、おっさんなんだよ」

賢哉「しようがねえだろ」

雅也「（と周りを眺めて）あ、あっちが外の

景色かな。（と深呼吸をすると大声で）や

っほー！」

悠喜「おい。そっち女子風呂だって」

雅也「え？ 嘘？」

と、仕切りの向こうから寧々の声が聞

こえる。

寧々の声「ねえ、今木内の声しなかった？」

雅也「やば……」

と、そのまま潜っていく雅也——笑っ

ている一同。

つづく